OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	林和比古教授の退官に因んで
Author(s)	柿本, 奨
Citation	語文. 1973, 31, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68604
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

林和比古教授の退官に因んで

林和比古教授は本年四月一日をもって停年退官されることになった。

教授が、大阪府立浪速高等学校と共に本学教養部の前身をなす官立大阪高等学校に着任されたのは、昭和二十一年のことであり、新制大学になってからは教養部に所属され、かたわら、文学部大学院の講義も担当されて、二十数年の長きにわたり励精して来られた。

教授は、元来、橋本進吉博士の流れを汲んで、国語学、特に文法学の研究をされた。昭和二十六年頃までのご論文は、主としてその方面の成果とお見受けするが、教授の語られる所によれば、本学において国語学のほかに国文学の講義も担当されたことが、枕草子と邂逅される機縁となり、研究以前に気質的に清少納言に対し強い共感を持たれたよしである。個性的な触れあいがあったということであろう。

枕草子ご研究の成果は、昭和二十六年本誌所載の「清少納言の精神機構」を皮切りに次々と発表され、論文目録によると、特に昭和三十年頃からは堰を切った如くに発表されていて、いかに枕草子に打込まれたかが察せられる。それと共に次第に文学のほうに傾いて来られたことは否めないが、しかし国語学から全く離れられたわけではなく、いわば国語学と国文学との双方にわたる視点のもとに枕草子に立向って来られたといえるだろう。それらのご論文がのちに大著『枕草子の研究』に結晶した。教授の志向は、芭蕉や近代文学のそれこれにも向けられているが、研究の上では今や枕草子一本槍の観がある。

教授は、どちらかといえば小柄なほうで、四十数キロの軽量であられる。剣道をたしなまれたことがあるよしで、自称「一段半」である。某野球監督流にいえば、「超初段」ということであろう。挙措敏捷で、歩き方が速い。何かの用事のためにご一緒した時だったと思うが、小柄なくせに二十キロ近く教授に差をつけて諸事緩慢な私は、ふうふういった。息をはずませながら、ふと思った。これは教授の学問とあながち無縁ではなさそうだぞ、と。

中古文学会などで発表者がお説に触れることがあると、あとで教授から鋭い質問ないし反駁が飛ぶ。自信に満ちた実に威勢のよい発言ぶりで、爽快感さえ覚える。

教授は細心精到な分析をされるけれども、トリビアリティーとは裏腹で鋭い判断につながり、他説に対しては賛否の意を明言され、自説

を立てるのもまた直截明快で、何事にも解決を目ざして曖昧低回を容れず、その率直な表現は勢のある文章となって生動している。教授の著作を読まれた向きのつとに感じておられる所であろう。

枕草子研究の推進にあまたの貢献をして来られた教授は、ここ数年来さらに歩を進めて枕草子本文系統の研究に没頭しておられ、堺本原態論とでもいうべきご見解を提唱されつつある。この見解は先蹤がないわけではないけれども、感想的寸言程度にとどまったようであり、かほどまでに精細な分析調査を経て論断したのは、教授をもって嚆矢とする。現代では教授独自の見解というに近い。孤高の説とでもいうべきそのご見解の証明に努めておられ、その盛んな研究意欲の持続には、衷心敬意を捧げたい。

私が教授に親しくお願いするようになったのは、一昨年の春、こちらの教養部に転じ来て以来のことであり、日はまだ浅いとしなくてはなるまい。人ひとりを知ることのむつかしさはさることながら、そこまで全き理解を望むよりもっと手前の所でいってさえ、私は教授のご性格をよく知るとはいえないかもしれない。このたび、ご退官記念の一集を編む企画があり、編集関係の方から送別の一文を求められた。それは、大体私が平素教授に最も近く身を置くゆえであろうとは察せられたが、真に最適任かどうか、省みざるを得なかった。といって、研究室を共にさせて頂いていて、日頃親炙しているのだから、辞退すべき理由のある道理はなく、お引受けしたのであるが、記して至らぬ所多い思いである。

教授には今後共ご誘掖下さることをお願いすると共にお変りなくいつまでもお元気でご研究を進めて頂きたく、本文系統論の完璧な構築を達成せられんことを祈念する次第である。幸、お宅は本学に近い。どうかしばしば研究室にお元気なお姿をお見せ下さらんことを。

昭和四十八年三月

柿本　奨